



三重県公立小中学校教頭会  
 〒514-0003 津市桜橋2丁目142  
 教育文化会館別館3階  
 TEL 059(228)2340  
 FAX 059(228)2271  
 E-mail: mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

# 第57回全国公立学校教頭会研究大会静岡大会

豊かな人間性と創造性を育む学校教育

郷土を愛し、人との関わりを大切にし、  
夢に羽ばたく子どもの育成

第1A分科会

## 「教育課程に関する課題」に参加して

津市立東橋内中学校 北岡明直

名古屋から新幹線で40分程、あっという間に浜松に着きました。駅構内には、有名な楽器メーカーのピアノが展示され、何人かの人達が立ち止まって、その素敵な音色に耳を傾けていました。人口80万人、小学校100校、中学校49校という浜松市。そこで、第57回全国及び第43回東海・北陸教頭会研究大会が行われ、私は2日目の分科会に参加しました。

教育課程に関する課題第1A分科会に参加しての感想を述べたいと思います。

北海道、石川県から2つの発表がありました。特に興味を持ったのは、北海道の中学校の取り組みで、学校の教育目標をシンプルなものに変えたというものでした。

ところで「貴校の教育目標は何ですか？」と問われた時、すらすらと答えることのできる教員は一体どれ程いるのでしょうか？ほとんどの学校が、知・徳・体をベースに、様々な角度から



目標を設定しているため、実際、教員にそれが定着しているかどうかを問われると、胸を張って答えられない現状があるのではないのでしょうか。北海道のその学校は、教育目標を「つなげる学び」というとてもシンプルなものに変えました。そして、教頭が先頭に立ち、教職員と共に、その目標を自分達の教育活動にどうつなげていくかを話し合い、実行へとつなげていったという取り組みでした。具体的には、学校教育目標「つなげる学び」を受けて、2つの取り組みが行われました。その1つ目は、授業の中で本時の「課題」と「終末」を「つなげる」ことです。2つ目は家庭学習を通して、「学校の学び」と「家庭の学び」をつなげる取り組みでした。職員の共通理解のもと、これら2つの「つなげる」を実践することにより、教職員が常に学校教育目標を意識することができるようになったということです。そして、その意識の変化が、最終的に授業改善へとつながっていったのだそうです。

この発表を聴き、自分の学校のことを振り返ってみました。もし自分の学校で「学校教育目標を言えますか？」と尋ねたら、一体何人の先生が答えることができるのでしょうか。少ないような気がします。時間短縮や負担軽減、あるいは効率を優先する余り、学校教育目標、具体的な行動計画などの原案が4月にはすでに準備されていて、その内容について吟味する間もないまま、教育活動がスタートしていつてしまっています。自分達でどんな学校を創りたいのか、そのためには授業によってどう学校目標を達成していきたいのか。そういったこともじっくり話し合ったこともなく進んできたように思います。学校教育目標をしっかり意識し、共通理解のも

とで行動すること、そのことが残念ながら欠けていたのではなかったかと反省させられました。毎日の授業や行事をただこなすだけのものになっていないだろうか、そういうことを強く考えさせられた発表でした。またこの発表は教職員に「学校を創っている」という意識を強く持たせる素晴らしい発表だったと思います。

実践発表の後、6～7名のグループに分かれ、「教頭として、他校種や地域と連携し、共同で育む学校教育にどのように関わったらよいか」という柱で話し合いを行いました。ある地域では、小中一貫教育を積極的に進めたいと考えていましたが、学校間の距離がかなり離れていて難しい状況でした。そこで教頭がいろいろな関係機関と連携し、ITを取り入れ、それぞれの学校を衛星回線でつなぎ、テレビ会議で子ども達同士の交流を行っているとのことでした。また、ある地域では、退職したお年寄りの方を学習ボランティアとして登録してもらい、放課後定期的に来て担任を助けてもらっています。教頭は、退職した方を探し、教育活動の依頼をしたり、ボランティア名簿を作成したりするそうです。教職員と地域の方をつなぐことに関わり、交流がスムーズに行えるよう、調整するのが教頭の役目だそうです。教頭が率先して新たなものを取り入れたり、教職員の中にやる気モードを作ったりすることがとても大切だと実感しました。

最後には、「学力向上の取り組み」の話題となりました。ある地域では、読書に力を入れるために、図書予算を大幅に増額して何十万円もつけていただいているそうです。また県独自の斉テストに関しては、採点は先生の負担になるので、少しでも軽減し、授業研究に集中し

てもらうため、外注で行っているところもあるそうです。土曜授業については他県ではほとんど行っていないことなどがわかりました。様々なことが行われている中で、何が一番大切かを見極め、取捨選択し実行していくことが必要だと思いました。

この分科会に参加し、「自分は教頭として一体何ができるのか？」ということをお問した一日となりました。全国の先生方と交流することで多くのものを得ることができ、素晴らしい一日を過ごすことができました。ありがとうございました。



## 第1B分科会

# 「教育課程に関する課題」に参加して

津市立草生小学校 藤田 泰司



第1分科会B「教育課程に関する課題」に参加しました。2人の先生の提言を受けて、38のグループ（1グループ司会者・記録者を含めて8人程度）で研究協議が行われました。午前中は岩手県普代村立普代小学校の菅原先生から、『特色ある学校づくりのため副校長としてどうかかわればよいか（～「小中一貫」「小中連携」教育の実践～）』というテーマで提言がありました。午後は、静岡県掛川市立佐東東小学校の鈴木先生より『確かな学力の向上を目指した教育活動への教頭の関わり（学校間、地域の連携を図った取組）』という内容の提言がありました。私の勤める安濃町でも地域教育推進協議会が核となって「小中一貫教育」を進めていますし、その中での一つの目標が「学力の向上」であります。今回参加した分科会のテーマは、私たちが目指すべき教育活動の一つのケースを示していただけるという意味で、大変興味深く、期待をもって分科会に臨みました。

菅原先生の提言は、平成29年に小中一体型の一貫校として開校を控え、今年度もその準備に

取り組む小学校での副校長としてのかかわり方を具体的に紹介するものでした。小中での授業の乗り入れ、小学校教諭による中学校体験授業、小中一貫教育を視点においた「道徳」授業の共同研究授業、小中が連携して取組む防災マップ作りの活動、中学校生徒会と小学校児童会が企画した合同あいさつ運動の取組など大変参考となる内容でした。提言校では「小中一貫教育コーディネーター」という担当を置き、副校長がそのコーディネーターと密接に連携し、開校に備えている姿がよくわかりました。

また午後からは、「学力向上を目指した教育活動への教頭の関わり」というテーマで、掛川市の鈴木先生からの提言がありました。「連携」ということをキーワードに「小小合同授業研修会」の実施、中学校教員による出前授業の取組などが紹介されました。特に子どもたちの自信とやる気を引き出すために、地域在住の教員OBによる学習ボランティア活動「学びっこタイム」を実施していること、夏休みに行われる「学習教室」の活動等は、本校のチャレンジタ

イムと同様の取組で強く印象に残りました。さらに、家庭学習の習慣づけを保護者とともに考える「ノーメディアディ」の実施なども、安濃町の地域推進協議会の取組と重なることが多く参考になりました。

グループ討議では、東京、富山、愛知、静岡

の教頭先生たちと意見交換をしました。それぞれの都道府県で教育行政の在り方や学校組織の実態は様々でしたが、子どもたちの豊かな人間性と創造性を育てようという気持ちは、すべての先生が持っていることがよくわかりました。

## 第2分科会

# 「子どもの発達に関する課題」に参加して

鈴鹿市立愛宕小学校 中野仁之

第2分科会「子どもの発達に関する課題」では、熊野市立新鹿中学校 長島一朗教頭先生が、東海・北陸ブロック、三重県を代表して提言していただきました。新任時代の同僚ということもあり、是非応援したいと思い参加しました。全国からの分科会参加者334人を前にして、3本の提言の最初、朝一の会場全体が緊張した雰囲気の中、長島先生は落ち着いて立派な発表をしていただきました。熊野市教頭会の確かな実践と、発表までの十分な準備を感じました。テーマは「中1ギャップ克服に向けて教頭としてのかかわり ～「子ども支援ネットワーク構築事業」の取組を通して～」でした。あと2本の提言は、静岡県焼津市教頭会の「豊かな心もち、自ら生き生き活動する子どもの育成に向けて～子どもの自尊感情を高める指導や支援ができる教職員の育成～」、新潟県三条市教頭会の「小中一貫教育における児童・生徒の社会性の育成に向けた教頭の役割 ～小中・小小の交流活動の充実と教職員の参画意識を高める組織づくり～」でした。

第2分科会3本の提言を通して、共通したキーワードは「つなぐ」だと感じました。子どもと子どもをつなぐ、職員間をつなぐ、保幼小中をつなぐ、学校同士をつなぐ、保護者・地域とつなぐ、関係諸機関とつなぐ……。それぞれの発表から「つなぐ」ことにより大きな成果が得られたことが報告されました。また、「つなぐ」上で教頭の役割が極めて大きいことも実感させられました。助言者からの「連携の要として、守備範囲が広く、感受性が強く、進化する、明るく、健康な教頭先生であってください。」との言葉が印象に残りました。



そして何よりも、グループ討議で全国の教頭先生と意見を交えることで、教頭としての視野を広げ、自身を振り返ることができたことを嬉しく思います。最後には、互いに握手を交わし別れ難い思いになれたことは、本研究大会の最大の成果でした。本研究大会の成功に向けてご尽力された全てのみなさんに感謝いたします。



### 第3分科会

## 「教育環境整備に関する課題」に参加して

伊勢市立早修小学校 八木 啓 輔

第3分科会では計3本の実践提案があり、それについての全体での質疑応答、そしてその後グループ討議をするという形で進められた。

1本目は奈良県天理市立西中学校による「地域との連携による教育活動と教頭の役割」というテーマでの発表だった。この学校の実践のキーになるのは、地域と学校をつなぐ「地域コーディネーター」だと感じた。西中学校では、PTA会長及び役員（元職を含む）や学校評議員、区長会長、校区スポーツ振興会、民生・児童委員、地域在住の元保育所長や元教員、学校ボランティアの代表等に依頼をしているようだった。グループの話し合いの中で、横浜市では地域コーディネーターはその職務に就く前に独自の研修を受け、仕事をしているということだった。発表校も横浜の中学校も「組織がしっかりしている」と感じた。しかし、組織がしっかりしてくると、逆に「顔が見えなくなる」ということになりがちだ。特に小学校では、地域ボランティアの方に直接お願いし、感謝の気持ちを

表すことも忘れてはいけないと思った。

2本目は富山県魚津市立西布施小学校による「学校・家庭・地域と連携した特色ある学校づくりを目指して」の発表だった。この発表では、家庭や地域との連携に関する年間計画、そして教頭の役割が明確にされていて、新しく赴任した教頭も戸惑うことなく仕事ができると思った。また、教職員も全体のイメージをしっかりと頭に入れながら、日常の活動に取り組めるところも良いところだと思った。

3本目は静岡県島田市立神座小学校による「学校安全における教頭の職務」の発表だった。DIG（災害 Disaster 想像力 Imagination ゲーム Game の頭文字を取った災害頭上訓練）やHUG（事前訓練）などの内容もさることながら私が最も感心させられたのは、島田市の教頭会の組織力と指導力だった。市の教頭会で話し合い、内容や取り組み方法を決め、市全体で統一して職員研修や子どもたちの防災学習を行っているのである。校長会もこの件については教

頭会に任せているらしい。ちなみに市の教頭会は毎週木曜日の午後1時30分から行われその場でいろいろなことが決められるようだ。全くうらやましい限りであった。それだけの時間の確保と組織力があってこそ、提案発表だと感じ

た。

グループ討議の時間には、実践発表についての意見交流だけでなく、日常の活動についての情報交換も行われ他県の様子もわかり、非常に有意義な時間であった。

## 第4分科会

# 学校組織の活性化は教頭がカギを握る!

四日市市立富田小学校 相馬 哲

第4分科会「組織・運営に関する課題」では、3本の提言がなされたが、その中で最も印象深かった「教職員の授業力向上により学校組織を活性化させるための教頭の役割～学力向上推進リーダーの取組を通して～」に絞って報告並びに所感を述べたいと思う。

山口県熊毛郡内では、48歳以上のベテラン教員が約半数、逆に34歳までの若手教員が2割程度という年齢構成になっており、大量退職・大量採用の時代を迎えることから、人材育成が急務であるとの危機感があった。そこで、「個々の教員のキャリアステージに応じた資質能力を伸ばしながら授業力向上により学校組織を活性化させることで子どもに確かな学力を身につけさせることができるのではないか。」と考え研究を進めている。山口県では学力向上を積極的に推進するために、地域の小中学校を継続的に訪問し、授業提供及び授業改善への指導・助言を専門的に行う教員として学力向上推進リーダー(教頭籍)が配置されている。しかし、推進リーダーの学校訪問は週1回程度のため、推進リーダーだけの指導では限界がある。そこで、教頭



と推進リーダーが連携し、教員一人一人の授業力や資質能力の現状について情報交換や意見交換を行っている。

その際の一つの指標として「ナインブロック」の活用が試行されている。教師としての力量を「授業力」と「その年代に求められる資質能力」の2つの力で評価・分析し、その教員のよさや課題を明確にしていき、個々のキャリアステージに応じた適切な指導・助言を行い、スキルアップを図っている。

助言者からは、若手とベテランでペアを組み、ベテランも指導しながら学ぶことや教頭が情報をもって個々にあたることが大切であること、ボトムアップさせるには推進リーダーと教頭だ

けではなく、学年主任等のかかわりが大事であること等の示唆があった。

大量退職・大量採用の時代が目前に迫り、次世代を担う若手教員の育成が必須であることは本県も同様である。提言は熊毛郡内の実践であるが、各校の実践につなげるべく考えさせられ

る内容であった。本分科会を通して、学校組織を意図的に動かしていくのは教頭としての大きな役割であるとともに、組織運営上最も留意すべきことは全職員でベクトル合わせをすることであることを改めて認識できたことが私にとって大きな成果であった。

## 第5A分科会

# 「若手教職員の育成に向けた教頭の取り組み」

尾鷲市立三木小学校 芝田基史



## 第5A分科会「教職員の専門性に関する課題」に参加して

第5A分科会は、表題の課題について、岐阜県海津市小中教頭会と香川県高松地区小中教頭会から提言がありました。2つの提言ともにはじめに各地区の教職員の年齢構成グラフが示され、50代以上の教職員が多数を占めること、これから数年の間に、退職に伴う多数の新規教職員が採用されること、そのため若手教職員の指導力向上への取組が急務であり、これに向けての教頭会としての取組状況が報告されました。

## 『海津市教育のスタンダード』の構築への教頭会の取組～保護者の安心感の構築

午前中は、岐阜県海津市小中教頭会から、

「教職員の指導力向上を図るための指導・助言～『海津市教育のスタンダード』の構築を目指して～」と題して教頭会としての3年間の取組が紹介されました。

海津市では、教育内容の共通化をスタンダードと呼び、授業のスタンダード、道徳のスタンダード、特別活動指導のスタンダード、スタンダードを進めるための研修計画、研究構想が、全教職員に冊子で配布され、それを市内で共有し、教頭会が中心となって推進しているとのことです。平成25年の時点で、教職員の9割に浸透しており、8割が大体実践していると回答しています。平成28年度には、「学習や生活の約束事のスタンダード」で、挨拶・聞く姿勢・話す姿勢・ハンドサインの活用・家庭学習のマニュアル化を進めているとのこと。この取組には、各校での推進と共に、毎年小学校・中学校3校を教頭会で訪問して、各校の成果と課題を共有していることが報告されました。

提言を基に、グループ別討議が行われました。私の参加した22班では、教頭会が中心となって、

「スタンダード」を推進することや、マニュアルがあることは、教員の力量を一定以上の水準に保つことができること、そして、若手教員に自信を持たせることができるなどの意見、多様な子どもに対しても画一的な指導を展開してしまわないかと心配する意見、若手は研修の機会も多く知らないことが多い反面、多くのことを吸収できるが、そのことに対するベテランの教職員の受け止めについて討議がなされました。

最後に助言者から、市一丸となって、気持ちを揃えて、目に見える形での教育実践の推進は、校内での教職員・子どもたちへの効果と共に、何よりも保護者に安心感を与えること、それを教頭会が組織を挙げて推進していることの重要性が話され、さらに市内共通した取り組みは、小中の連携を図りやすくし、中1ギャップの解消に大きく役立つ可能性があるとのことでした。しかし、マニュアルは形骸化しやすいこと、何のためのマニュアルかを常に問い続けること（もちろん子どもの成長を保障するためのものであること）が重要であること。統一的な指導が、若手教職員の指導力向上への効果が期待されると同時に、それがベテラン教職員の足かせにならないように、教頭として一人ひとりの教職員に合わせた育成を図ることが重要であるとのことでした。

#### 「直接的な働きかけ～指導」と「間接的な働きかけ～支援」～管理職の先見性

午後は、香川県高松地区小中教頭会から、「教職員の資質向上にかかる教頭の役割～教頭の働きかけ 校内研修やOJTを通して～」と題して教職員の特性や個性を生かしながら力量を発揮させていくことが、教頭の重要な職務であり、それが組織の活性化にもつながるとら



えて、研究推進している様子が報告されました。

教頭の教職員への指導助言を、「直接的な働きかけ～指導」と「間接的な働きかけ～支援」に分け、その内容を整理し教頭会で共有しているとのことでした。

「直接的な働きかけ」の具体例として、「教頭が企画・運営した校内研修」があげられ、ワークショップ型や講義形式などの実施形態も工夫しながら、教職員が必要とする研修をタイムリーに仕掛けていく様子が報告されました。

「間接的な働きかけ」としては、小規模なチームでの学校課題への対応で動きやすくする場をマネジメントすること、そのチームを若手教職員とベテラン教職員で編成することで、若手教職員には経験と自信を、ベテラン教職員には学校経営への参画を図り、学校組織全体の活性化につなげているとのことでした。

この提言に対して、グループで各県各地区の様々な工夫が多く討議され、1年目・5年目・10年目の教職員を学校の枠を超えてグループ化し研修させている例や、教職員への指導助言の効果をあげるためには、先ず教頭自身が子どもたちの実態を正確に把握し、教職員の指導による子どもの成長を教職員に的確に伝え、達成感を味わせるように伝えるなどの意見が出されました。

研修の活性化や指導の中身に対して、教頭の

日常業務との両立をどう図っているかの疑問が多く、班より上がりました。これに対して、高松地区教頭会の回答は、半数の学校に教頭が複数配置されているとのことでした。これには、会場から一斉に驚きの声が上がりました。

最後に助言者より、教頭が実施する研修は、学校全体の様子を見渡して、タイムリーなものを提供できるので、教職員の負担感は少なくなる。昨年までは、鳥取県校長会のアンケートで、管理職に必要な力として、「判断力」「決断力」「調整力」が上げられていたが、今年度は、それらを追い越し、1位に「先見性」があげられたこと。先行き不透明な社会の中を学校も含めて導く力が、管理職に求められていると話されました。他に、支援では、言葉の通り、常に教職員の活動を見守り、声かけを続けていくことの重要性にも触れられました。そして、教員の資質の中では、授業力が第一であり、若



手教員に第一に向上させるべき資質であることを強調されていました。

今回の研修に参加させていただき、全国の教頭先生方と意見を交わすことで、全国の仲間たちが多忙な中、子どもたちの豊かな成長を支えるために、教職員の資質向上に真摯に取り組んでいる姿を知ることができました。また、他県での多様な教育実践や組織マネジメントを知ることができ、教頭職としての自分自身の幅を広げられた気がします。

## 第5B分科会

# 「教職員の専門性に関する課題」に参加して

松阪市立漕代小学校 木野本 和之

本年4月、教頭として新たなスタートを切った。右も左もわからない中、「勉強になるから行って来たら」という先輩の言葉に後押しされ、全国大会に参加しました。

1日目の会場アクトシティ浜松に到着すると、全国各地から集まった教頭先生方が約2,800名とのこと。広い会場いっぱいの参加者に、まず圧倒されました。

2日目は、第5B分科会に参加しました。テー

マは『教職員の専門性に関する課題』。福岡県豊前市中学校教頭会からは、20年前「いじめ」が原因で中学生が自らの命を絶つという痛ましい事件を契機に始まった「4.16人権集会」「いじめ防止大会」など、全市を挙げての取り組みが、時間の経過、当時のことを知る教職員の減少に伴って行事消的なものになりつつあった現状を踏まえ、教頭会として全市的な取り組み、教職員への指導・助言を行った結果、教職員が自

らの責任を自覚し自分たちの問題として取り組めるようになるまでの実践報告がありました。

静岡県熱海市教頭会からは、年齢構成の異なる市内各校の実情を踏まえ、教職員の力量を高めるため教頭としてどのように関わるかについて取り組んだ実践報告がありました。

いずれの報告からも感じたことは、教頭間で各校の現状・取組に係る情報交換を行い、課題を共有することの大切さでした。ともすれば、自校の業務に忙殺され周囲に目が向かなくなり

がちですが、教頭会という組織の活動によってより広い視野で業務に取り組むことが可能になることを学ぶことができたことが、自分にとって大きな収穫となりました。

また、分科会のグループ協議では各地から参加した教頭先生方と意見交換を行い、校種・規模・立地の違いはあるものの、現在の職場での課題や、取組や成果など様々な情報を交換することができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。



## 第6分科会

# 「教頭としての魅力ややりがいとは」

志摩市立浜島中学校 小林和浩



全国公立学校教頭会研究大会静岡大会の2日目、第6分科会「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」に参加しました。

分科会前半では、まず「平成26年度全国公立学校教頭会の調査結果」についての報告がありました。「時間と労力を費やしたい職務内容」の上位は、①職場の人間関係づくり、②教職員の評価・育成であるのに対し、「実際に費やしている職務内容」の上位は、①文書処理・各種調査依頼への対応、②保護者・PTAとの連携でした。職務に対するやりがいや魅力と実際の職場の現状が一致していないという課題が浮き彫りになりました。他にも教頭が学級担任や事務職を兼務している学校数、教頭の複数配置状況、主幹教諭の配置状況、勤務時間や休みの日の出勤数の状況など、いろいろな実態がわかりました。

さらに、「これからの教育改革と新しい教師像」というテーマで、文科省初等中等教育局企画官の安井順一郎さんの講演を聞きました。

午後からの分科会後半では、グループ討議をしました。テーマは「①副校長・教頭として魅力ややりがいをもって職務を遂行するためには」「②魅力ある学校づくりを実現するために今できること」の二つでした。その中で青森、埼玉、新潟、山口…など全国の教頭先生方の意見を聞いたことは大変貴重でした。「生徒指導上の問題を抱える学校だが、職員が同じ課題に向き合うように職員同士をコーディネートしていくようにしている。」「職員が変わると、子どもが変わる。それを地域の人や保護者が見てくれている。そんな時にやりがいを感じる。」といったやりがいについての具体的な話も聞かせていただきました。

最後のまとめで、助言者からの「教頭じゃないとできない仕事は何か。何をしようとして教頭になったのか。」「教諭にはできないこと、管理職しかできないこと、それが学校経営なのです。」という投げかけが、今年から教頭職についた自分にとっては心に残りました。

今大会でのさまざまな意見をもう一度自分に返し、教頭としてのやりがいをしっかり見つけていきたいと思いました。



## 特I分科会

# 「今、注目のアクティブラーニング」

東員町立城山小学校 川村 光次

初めて全国教頭会研究大会（静岡大会）に参加した。大変スムーズな運営と細やかで丁寧な対応は、数年前から静岡の全教頭先生が関わり準備してきて頂いたおかげだった。

「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」という大会主題で、3日間の研究大会が行われた。2日目の課題別分科会で、私は「特別課題」分科会に参加した。テーマは「21世紀社会に求められる『資質・能力』を踏まえた教育課程の編成、実践をリードする副校長・教頭の役割」というものだった。



これからの子どもたちが生きていく社会は、今後もさらに急激な変化がもたらされる大変厳しいものになると予想されている。例えば10年後には、現在の職業の65%がなくなり、新しいものになると言われている。教育再生実行会議や中教審からは、そんな時代を生きていく子どもたちに、今、求められる資質や能力、あるいは学力について、様々な提言等が出されている。そして、新学習指導要領の改訂に反映させ、教育改革を進めようとしている。例えば、「学力」では、これまでの「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の育成に加え、新たに「主体性・多様性・協働性」を加えた真の学力を身につける必要があることを提言している。「思考力・表現力・判断力」などの能力は、それを働かせる学習活動の中で育成する事が必要であると言われている。つまり、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと「どのよ

うに学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があるとしている。

今、注目の「アクティブ・ラーニング」には、例えば、問題解決学習・体験学習・調査学習・グループディスカッション・ディベート・グループワークなどの学習活動がある。これらの学習活動はこれまでも行ってきたが、新たに「アクティブ・ラーニング」と言われている何が違うのだろうか。今回、研究大会に参加し明確になったことは、「アクティブ・ラーニング」は、それを何のために、どの知識を使って行うかを意識したものであることが重要であるということだ。「アクティブ・ラーニング」を充実させるには、子どもが学習の見通しを立て、主体的・協働的に課題の発見・解決に取り組み、



学習したことを振り返る活動が重要であることが分かった。授業改善の例として、一斉授業だけではなく、ペアで意見を交換する、ホワイトボードを使って話し合う、付箋を使って話し合う。他にも先生が説明するだけでなく、立場を決めて論議する、ポスター等を作成して発表するなど工夫すると良い。つまりは、子どもをお客さんではなく、プレーヤーにするというふうにと考えると分かりやすいと思う。新しい活動をするのではなく、今までの活動を見直し、少し工夫すると良いのだ。



特Ⅱ分科会

## 「特別支援教育を視点にした今日的な課題」

亀山市立関中学校 徳田浩一



徳川家康公顕彰四百年という節目の年に、重厚な家臣団を誇った徳川氏ゆかりの地である静



岡県浜松市において、全国の副校長・教頭が一堂に会して本研究大会が開催されたことに、大きな意義深さを感じつつ3日間の日程を終えることができた。

私は、2日目の分科会は特別分科会Ⅱに参加し、「特別支援教育を視点に、今日的な課題を考える」をテーマとした講演を聴いて演習を行った。講師の和久田学先生の話は、どれもが興味深くかつ新鮮であり、特別支援教育を取り巻く

今日の課題や子どもの問題行動の現状と対応について、大いにヒントとなる事柄が数多く含まれていた。また、他県の先生方とのグループ演習も、即座に役立つ内容であったと思う。

私が、特に関心を寄せたのは、“いじめ”に関する内容であった。「51.8%の学校がいじめを認知している。しかし、それは、48.2%の学校がいじめは全くないと言っているのと同じこと。本当だろうか？」で始まった午後の講座と演習は、正直少し眠くなりかけていた私の目を見開かせるに十分なプロローグであった。まず、いじめの定義についてキーワードになったのは、「力の不均衡」「くり返される行動」「意図的なネガティブな行動」「不公平な影響」の4つ。その中でも、「力の不均衡」に端を発するいじめは、決して被害者に「やり返せばいい」といった論理は通用しない。「不公平な影響」があるから加害者は気づくことができず、いつの間にか加害者になっているかもしれない。だからこそ、いじめ関係は保持され深刻化しやすいのだという件には、大いに共感的理解をもつことができた。

また、いじめ対策として論じられたのは、予防的措置、防衛的措置と介入支援という3つの目的であった。とりわけ、いじめ予防という視点で、「安全で安心な学校」の実現に向けて、

教頭としてどこに力点を置くべきかについて考えさせられる部分は多かった。講演の最後に案内があった、「学校安全調査」(子どもの発達科学研究所)にも興味を引かれ、自分の学校でも、いじめ状況の把握や学校風土について可視化し、今後のいじめ予防や学校経営の指針として活用することができるものと感じた。

この他にも、特別支援教育をインクルーシブ教育の立場から話をされ、発達障がいへの正しい理解と支援について学ぶことができた。さらには、保護者支援・家庭支援に関して、2人1組になって演習できたことは、他県の副校長・教頭先生方との交流もでき、大変有意義な時間を過ごすことができた。

一言で言えば、実に盛りだくさん。しかしながら、時間の経過をほとんど感じることはないほど、私の「関心・意欲・態度」は合格点であったと自己評価して、分科会の報告に代えたい。



## 静岡大会を3日間通して

名張市立蔵持小学校 西澤 祐子



平成27年7月29日(水)～31日(金)の3日

間にわたり、研究大会に参加させていただきました

した。3日間の研究大会の内容等について下記のようにまとめましたので、報告します。

#### 【1日目】〈全体会〉

開会行事の後のシンポジウムでは、「郷土を愛し 人との関わりを大切にし 夢に羽ばたく」をテーマに3人のシンポジストよりそれぞれの立場から話を聞きました。自己決定する場面が圧倒的に少なくなっている今の子どもたちに対して、夢を語らせることの大事さとともに、大人も自分の夢を語っていくことが大事であることを学びました。

#### 【2日目】〈分科会〉「第1分科会 教育課程に関する課題」

2つの事例報告とグループ協議が行われました。

##### 〈事例報告①〉

空知教頭会（北海道空知）では、平成26～28年度の3カ年「ふるさと空知を拓く児童生徒の学びの環境の充実」をテーマに、「教育目標を具現化する教育課程の編成と実施」「異校種間の連携を図る教育課程の編成と実施」を柱として取り組んでいます。特徴としては、管内すべての小中学校において同一のアンケートを実施し、その実施結果をもとに教育課程を編成していることです。

小中一貫教育の取組事例として、小中共通の「生活リズムチェックシート（生活リズムモニター攻略ブック）」を活用した取組が報告されました。このシート作成に当たっては、学校だけでなく、教育委員会やPTAも巻き込み、行政、学校、家庭がお互いに連携・協働して取り組まれています。

管内同一アンケートの実施や、生活リズムチェックシートの取組のような、行政、家庭も巻き込んだ組織的な取組は、今後の私たちの取組に

参考となるものでした。

##### 〈事例報告②〉

中能登町（石川県鹿島郡）では、「児童・生徒の安全、安心な環境づくり」「地域とのふれあい」「教頭のかかわり」を目標に取り組んでいます。特徴としては、地域との連携をより充実させるため、教頭会として「地域人材活用のための名簿づくり」を行っていることです。この取組により各学校での地域人材の有効活用が高まるようになってきたとのことでした。

##### 〈分科会でのグループ協議〉

私のグループ（静岡県、東京都、大分県、福島県、福井県）でも、それぞれの学校で、学校や地域の実情に合わせて、鑑賞行事等の合同授業など何らかの小中連携事業を実施しているとのことでした。課題として、連携事業やボランティアの活用は、学校教育にとって大変有効なことは言うまでもないことですが、事業が増えることで、コーディネーター役である教頭としての業務も増えることから、事業の見直しも必要であるとの意見が出されました。

#### 【3日目】〈全体会〉

「歴史に学ぶ補佐役の役割～徳川家康とその家臣団を通して～」というテーマで講演がありました。戦国時代に活躍した名武将たちにとって、参謀役である武将の存在は大変大きなものでした。「先を見越し、周りの状況を瞬時に把握し、主君が決断する際に必要な情報をいかに提供できるか」このことは、まさに学校運営を支える私たち教頭にも相通じるところがあり、大変勉強になりました。

最後に、全国各地から参加して下さった教頭先生方と語り合えたことは、私にとって大変意義深いものとなりました。

## スキーバイブル「私をスキーに連れてって」

朝日町立朝日小学校 荻田直樹

「恋人がサンタクロ〜ス♪本当はサンタクロ〜ス♪・・・」冬が近づくといろいろな場所で耳にするフレーズです。この曲を主題歌とする映画「私をスキーに連れてって」は、公開以降スキー人気の高まりとともに、スキーヤーのバイブルとも言える映画作品となりました。かく言う私も、何度も何度も繰り返しビデオを見ては、イメージトレーニング？に励んだものでした。

私とスキーとの出会いは、大学1年の冬でした。所属するクラブの先輩、同輩とともに戸狩温泉スキー場に出かけたのが初めてでした。全くの初心者の方は、初日は転んでばかりでしたが、午後になるとリフトにも乗れるようになりました。二日目になると、体育会系クラブではよくありそうな先輩からの一言がやってきました。「馬の背いくぞ！」そこは、いわゆる上級者ご用達のコブ急斜面。上から見ると、真っ白な断崖絶壁でした。初心者にも優しい迂回コースもありましたが、1年生が断れる訳はなく・・・。誰も助けってくれず孤独と闘いながら滑り（転がり？）降りました。いったいどのくらいの時間がたったのか、やっと下まで降りた頃には疲れ切っていました。夜になると体がピシピシいうほどの筋肉痛になっていたことが懐かしく思い出されます。

それ以来、なぜかスキーにはまってしまい、冬になるのが待ち遠しいほどになりました。志賀高原に行くと「私をスキーに連れてって」の主人公になりきり、天候が悪くなると「ブリザァ〜〜ド、ブリザ〜ドッ♪」と口ずさみながら滑っていました。そして、級別テストに挑戦。2級、1級と受検し合格しました。しかし、いざ合格するとスキー熱も下がり始め、少しずつゲレンデから遠ざかってきました。スキーバイブルはテレビの台の中に片づけられ、しばらく再生されることはありませんでした。

三十代半ばが近づいたころ、スキー板の革命とも言える"カービンクスキー"が登場し、スキーに対する気持ちに再び火が点きました。「よし、準指導員の資格に挑戦しよう！」と決意し、再び週末になるとゲレンデに通い始めました。それまで

自己流で滑ってきた私には、基礎スキーと呼ばれる種目に四苦八苦をしながら練習を重ねました。ボーゲンからパラレル大回り・小回りといろいろな滑りを覚えました。冬の間どれだけ滑ったでしょう。3月に行われる検定試験を無事合格し、晴れて準指導員のバッチを手にすることができました。その頃には、大学時代の友人もスキーに精を出し始め、二人で長野県や岐阜県のスキー場に毎週のように通い、さらに上の資格を目指しました。

今では、二人とも指導員の資格を取り、スキー教室の指導や、三重県スキー連盟で指導員を目指す方々への指導などを行っています。スキーを初めて滑る小学生を教えるのはとても楽しく、上達の早さには驚くばかりです。また、定年後に指導員資格を取ろうとする方々も多く、その元気に圧倒されています。

今、目指すのは「筋力をできるだけ使わない楽なスキー」。いくつになってもスキーを楽しむためには必要な技術です。毎年二人で行く八方尾根合宿は、行き帰りの車中で技術論に華を咲かせ、宿でお酒を酌み交わしながらスキーの話で盛り上がり、そんな冬が間もなくやってきます。時折流れる「スキー天国、サーフ天国」を聞きながら、凍った雪道を走るのが、今から待ち遠しく思います。



郡市だより

## 土曜授業について

桑名市立長島中学校 中西良行

長島中学校区として、教育委員会の指導のもと、「防災学習」に取り組んで、本年度で3年目になります。（「学校防災サミット in 長島」）

1年目は、長島北部小学校・伊曾島小学校が中心になっての取組、発表を、2年目は、本校と長島中部小学校が中心になっての取組、発表を行いました。アドバイザーとして大学教授や地域の「さきもり塾」の方々、市の防災危機管理課の方も参加していただきました。（時にNEXCO西日本の方—高速道路の法面に避難スペースを設置する件）会は、教育委員会の担当の方がリードしていただき、そこに各校の管理職、防災担当者、PTA役員、自治会長さんが、4つ～5つのグループに分かれ、討議、発表をするという形式でした。（KJ法やクロスロードゲーム等を利用）

3年目の今年、本校は『土曜授業』との絡みで「防災学習」に取り組んでいます。1回目は5月23日（土）の午前中に防災平和コンサート【ヒルストーン】（東日本震災復興に向けて）、午後からは、防災学習講演会【諸戸靖氏—前輪中の郷館長】を実施しました。

2回目は11月28日（土）に大学教授をお招きして、防災講演会と防災教室（防災避難グッズ体験学習）を実施する予定です。

余談になりますが、本校—長島中学校の校舍は、長島城をイメージして、建てられています。（長島城跡に建っています。—正確には隣の小学校が跡地です）そのため、屋上がありません。津波が来たら何処へ→そこで、上記の高速道路法面が登場するわけです。

